KYOTO
GRAPHIE
international
photography festival

KYOTOGRAPHIE
京都国際写真祭 2016

Press Kit ver.1（2016年2月5日）

2016年4月23日|土|−5月22日|日|
www.kyotographie.jp

目次

3	KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭とは?	
4	2016年のテーマ「Circle of Life いのちの環」	
5	ヴィジョン	
6	会場（予定）	
7	KYOTOGRAPHIE 2016 出展作家	
8	フランス国立ギメ東洋美術館・明治写真コレクション 茶のある暮らし	1
9	サラ・ムーン	2a, 2b
10	ティエリー・ブエット	3
11	福島菊次郎	4a, 4b
12	クリス・ジョーダン＋ヨーガン・レール	5
14	マグナム・フォト／EXILE ―居場所を失った人々の記録	6
15	古賀絵里子	7
16	Coming into Fashion ―A Century of Photography at Condé Nast コンデナスト社のファッション写真でみる100年 presented by CHANEL NEXUS HALL	8
17	クリスチャン・サルデ：写真・映像 高谷史郎：インスタレーション 坂本龍一：サウンド	9
19	銭海峰（チェン・ハイフェン）	10
20	アントニー・ケーンズ	11
21	Light by Erwin Olaf presented by Ruinart	12
22	アルノ・ラファエル・ミンキネン	13
23	Associated Program	14, 15
24	パブリックプログラム＆教育プログラム	
25	インターナショナル・ポートフォリオレビュー	
26	マスタークラス＆ワークショップ	
27	キッズプログラム／教育プログラム	
28	パブリックプログラム（来場者向けプログラム）	
29	Sustaina Village（サスティナビレッジ）	
30	KYOTOGRAPHIE サテライトイベントKG＋／KG＋AWARD	

*全てのプログラム内容、展覧会名、会場に関しましては2月5日現在のもので、
予告なく変更になる可能性もございます。最新情報は担当者にご確認をお願いします。

［正式名称］

KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2016

International Photography Festival

主催｜KYOTOGRAPHIE実行委員会
共催｜京都市、京都市教育委員会

事務局｜一般社団法人 KYOTOGRAPHIE
〒603-8146 京都市北区鞍馬口通寺町西入ル新御霊口町270
Tel. 075 708 7108

広報問い合わせ先｜
［事務局内広報担当］ 木藪・市川・鮫島（日）パジェ（英・仏）
press@kyotographie.jp｜Tel. 075 708 7108

［東京広報担当］ 森繁
tokyopress@kyotographie.jp｜Tel. 03 3725 8877（traffic内）

KG+ ケージープラス

サテライト・イベント KG＋

主催｜KG＋実行委員会

広報問い合わせ先｜
［KYOTOGRAPHIE事務局内広報担当］ 木藪（日）
press@kyotographie.jp
［KG＋事務局 広報担当］（英／仏）
info_kgplus@kyotographie.com｜Tel. 075 708 7108

KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭とは?

「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭」は、世界屈指の文化都市・京都を舞台に開催される、
日本でも数少ない国際的な写真祭です。一千年の長きにわたって伝統を守りながら、
その一方で先端文化の発信地でもあり続けてきた京都。その京都がもっとも美しいといわれる春に開催されます。
日本および海外の重要作品や貴重な写真コレクションを、趣のある歴史的建造物やモダンな
近現代建築の空間に展開し、ときに伝統工芸職人や最先端テクノロジーとのコラボレーションも実現するなど、
京都ならではの特徴ある写真祭を目指します。

これまで

2011年の東日本大震災を受け、日本と海外の情報交換の稀薄さを目の当たりにしました。
それはおのずと双方の情報を対等に受信発信する、文化的プラットフォームの必要性への確信となりました。
日本はカメラやプリントの技術は世界を先導しているにもかかわらず、
表現媒体としての評価が日本ではまだまだ低いと感じられる「写真」。私たちはここに着目し、
その表現手段としての「写真」の可能性を見据えるべく国際的フェスティバルをたちあげ、
この世界が注目する伝統と革新の街「京都」で実現することを誓いました。

これまで多くの企業や団体、個人の皆様のみならず、市、府、国のご協力もいただきました。
このフェスティバルの発展は皆様のご支援なくしてはありえません。
国際的とはまだまだ言い難い日本と海外を対等に繋げるべく
私たちは日々試行錯誤を重ねておりますが、同時に様々な出会いも生み出されています。
私たちはそこから新しい価値が生まれてくることを信じ、このフェスティバルをさらに発展させるべく邁進します。

2016年のテーマ

Circle of Life
いのちの環

2016年のテーマは「Circle of Life　いのちの環」です。
いのちは存在するかぎり、あらゆるものとつながり、
その関係性を育み、そして死や消滅を迎え、
時として新たないのちに還元されます。
生まれ出たひとつひとつのいのちにはその存在理由があり、
小さないのちの環は、他のいのちの環とつながり、
より大きな環の一部となります。
地球の悠久の時間軸をあらわす縦の環と、
その広大な地球を物質的につなぐ横の環。
新緑の美しい頃、鑑賞者はKYOTOGRAPHIEで
インスピレーショナルな作品と出会うことで、
あらゆるいのちが紡ぐ大いなる循環に導かれ、
自身に脈々と受け継がれる物語に耳を澄ますことでしょう。

皆様の「いのちの環」に新たな環がつながることを祈りながら。

KYOTOGRAPHIE 共同創設者／共同代表
ルシール・レイボーズ & 仲西 祐介
KYOTOGRAPHIE Founders & Co-Executive Directors
Lucille Reyboz & Yusuke Nakanishi

ヴィジョン

KYOTOGRAPHIEは、ひとつの表現媒体であり、芸術的手法である「写真」への理解を深め、
その可能性を伝えることを目的としています。

国内外の気鋭の写真家による作品の展示を中心として、多くの写真関係者と観客が集い、様々な交流によって、
そこから新たな創造性が生まれるような、国際的なプラットフォームの構築を目指しています。

会期中は数々の教育プログラムを実施し、子供から大人、アマチュアからプロ写真家まで、
写真を通して、芸術や建築、歴史文化などの関連分野にも造詣を深めていただけるよう取り組みます。

「観客・アーティスト参加型」「歴史的建造物を活用した斬新な展示デザイン」
「国際色豊かな事務局チームによる運営」といった独自性において、京都発信の日本国内における
国際的な現代アートイベントとしてのモデルとなることを目指します。

KYOTOGRAPHIEを通して生まれた交流から、新たなクリエイションやビジネスが生まれること、
京都での芸術分野の雇用促進へつながることを希求します。

開催地・京都への世界的な注目度を高め、
国内外から京都に足を運ぶ理由となる重要な年間行事として定着することを目指します。

会場（予定）

1. 虎屋 京都ギャラリー

2a. ギャラリー素形

2b. 招喜庵（重森三玲旧宅主屋部）
［通常非公開］

3, 4a. 堀川御池ギャラリー

4b. 立命館大学国際平和ミュージアム

5. 誉田屋源兵衛 黒蔵
［通常非公開］

6. 無名舎
［京都市指定歴史的意匠建造物｜通常非公開］

7. 長江家住宅
［京都市指定有形文化財］

8, 9. 京都市美術館別館

10. ロームシアター京都

11. SferaExhibition

12. ASPHODEL

13. 両足院（建仁寺内）
［通常非公開］

14. 村上重ビル 地下

15. 何必館・京都現代美術館

KYOTOGRAPHIE 2016 出展作家

出展作家数　十数名ほか、コレクション展を含めると約150名
参加作家国籍　8ヶ国ほか、コレクション展を含めると多数
会場数　京都市内15会場

1. フランス国立ギメ東洋美術館・明治写真コレクション
茶のある暮らし
Guimet National Museum of Asian Arts,
Photographic collections
—Tea and Life in Meiji period
虎屋 京都ギャラリー

2a, 2b. サラ・ムーン（フランス）
Sarah Moon
ギャラリー素形／招喜庵（重森三玲旧宅主屋部）

3. ティエリー・ブエット（フランス）
Thierry Bouët
堀川御池ギャラリー

4a, 4b. 福島 菊次郎（日本）
Kikujiro Fukushima
堀川御池ギャラリー／立命館大学国際平和ミュージアム

5. クリス・ジョーダン（アメリカ）＋ヨーガン・レール（ドイツ）
Chris Jordan + Jurgen Lehl
誉田屋源兵衛 黒蔵

6. マグナム・フォト／EXILE—居場所を失った人々の記録
EXILE: 1945 to Today by Magnum Photographers
無名舎

7. 古賀 絵里子（日本）
Eriko Koga
長江家住宅

8. Coming into Fashion
—A Century of Photography at Condé Nast
コンデナスト社のファッション写真でみる100年
presented by CHANEL NEXUS HALL
京都市美術館別館 1階

9. 写真・映像：クリスチャン・サルデ（フランス）
インスタレーション：高谷史郎（日本）
サウンド：坂本龍一（日本）
Christian Sardet (France): images
Shiro Takatani (Japan): installation
Ryuichi Sakamoto (Japan) : sound
京都市美術館別館 2階

10. 銭海峰（チェン・ハイフェン／中国）
Qian Heifeng
ロームシアター京都

11. アントニー・ケーンズ（イギリス）
Antony Cairns
SferaExhibition

12. Light by Erwin Olaf
presented by Ruinart
ASPHODEL

13. アルノ・ラファエル・ミンキネン（フィンランド）
Arno Rafael Minkkinen
両足院（建仁寺内）

———

アソシエイテッド・プログラム｜Associated Program

14. K-NARF（フランス）
村上重ビル 地下

15. サラ・ムーン（フランス）
何必館・京都現代美術館

1. Guimet National Museum of Asian Arts, Photographic collections —Tea and Life in Meiji period
フランス国立ギメ東洋美術館・明治写真コレクション—茶のある暮らし

虎屋 京都ギャラリー

［左より］
二代目鈴木真一
「茶道」1880年代、鶏卵紙、手彩色 ©MNAA—Guimet, Paris.
ライムンド・フォン・シュティルフリート
「王子の茶屋」1875年頃、鶏卵紙、手彩色 ©MNAA—Guimet, Paris.
アドルフォ・ファルサーリ
「茶器を持つ娘」1885年頃、鶏卵紙、手彩色 ©MNAA—Guimet, Paris.

ヨーロッパにおける東洋美術の殿堂・ギメ東洋美術館
KYOTOGRAPHIE 2015で好評を博した写真コレクション展が今年も開催！

KYOTOGRAPHIE 2015で、武士をテーマに肖像写真をあつめた「サムライの残像」展が大きな話題となったフランス国立ギメ東洋美術館の写真コレクション展。今回は、日本文化のあらゆる場面に影響を与えてきた「茶」の世界を切り口に、幕末・明治期に撮影された写真を特集展示する。京都・神戸にスタジオを構え活躍した市田左右太の作品や、日下部金兵衛が撮影した茶屋の風景写真、鈴木真一撮影によるお茶会のポートレート、鹿島清兵衛撮影の作品が収められた写真アルバムなど、茶にまつわる写真作品が一堂に会す本展は、新たな角度から茶に触れるまたとない機会となる。

会場は前回に引き続き、虎屋 京都ギャラリーにて開催。ギメ東洋美術館は東洋美術を専門とするフランスの国立美術館。美術館の名は設立者のエミール・ギメに由来するもので、実業家だった彼が日本や中国、インド等で収集した美術品や遺物をもとに、1879年リヨンで設立した。この後、1885年にパリに移設、1928年に国立美術館となり、1945年にはルーヴル美術館の東洋部門を担うこととなった。ルーヴル美術館所蔵の東洋コレクションが移された同館は、現在、非アジア圏で最大規模の東洋美術コレクションを誇る。写真コレクションには、幕末から明治期の日本で撮影された貴重な作品が多数収蔵されている。

2a, 2b. Sarah Moon
サラ・ムーン（フランス）

［左より］
The one before last, 2011 ©Sarah Moon
The japanese bird, 2013 ©Sarah Moon
The umbelliferae, 1993 ©Sarah Moon
The rock, 1999 ©Sarah Moon

フランスで好評を博した話題作が日本上陸
生と死、時の儚さを映す幻想の写真世界

Late Fall ｜ ギャラリー素形

Time stands still ｜ 招喜庵（重森三玲旧宅主屋部）

詩的かつノスタルジックな描写で知られる稀代の映像アーティスト、サラ・ムーン。世界中に熱狂的なファンを持つ彼女が、2016年度のKYOTOGRAPHIE京都国際写真祭で披露するのは、《Late Fall》と《Time stands still》のシリーズ。

《Late Fall》は、近年、“時の美しさ、不確実さ、儚さ”を制作テーマとしてきたムーンが、フランス国立自然史博物館所蔵の植物標本や動物の剥製をモチーフに制作し、フランス本国での展覧会が大好評を博した作品群で、生と死、神話や寓話、孤独など、心の内奥にあるものを想起させる独自の世界観を創出している。

《Time stands still》は、ヨーロッパ各地の風景をモノクロームで捉え、水平線をイメージして制作された。薄い土佐和紙に印刷されたプラチナプリントは、裏打ちされずに吊るすように額装され、作品世界の繊密さをより深いものにしている。

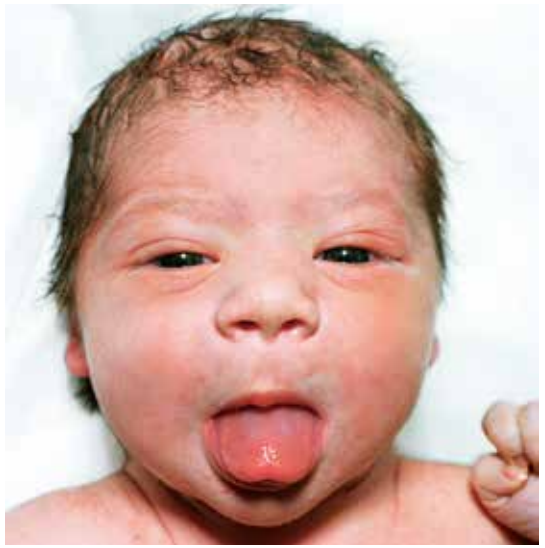
1941年フランス・ヴィシーに生まれ、60年代にモデルとして活躍したサラ・ムーンは、70年代にファッションや広告の分野で写真家としてのキャリアをスタートさせた。シャネルやディオール、コムデ ギャルソンを含むトップメゾンの仕事に携わり、1985年には作家活動を開始、1995年にパリ写真大賞を受賞した。写真集には『Improbable Memories』（1981年Matrix）、『VRAIS SEMBLANTS: Sarah Moon』（1991年パルコ出版）、優れた写真集を選出するフランスのナダール賞を受賞した『Sarah Moon 1,2,3,4,5』（2008年 Thames & Hudson）等がある。

3. The First Hour
うまれて１時間のぼくたち

Thierry Bouët ｜ ティエリー・ブエット（フランス）

堀川御池ギャラリー １階

その記憶はなくても、誰もが経験する誕生の瞬間
By ティエリー・ブエット



［左より］
Boy 58 minutes old,
©Thierry Bouët
Boy 35 minutes old,
©Thierry Bouët
Girl 9 minutes old,
©Thierry Bouët

生後１時間以内の新生児を撮影し、25点のシリーズにまとめたフランスの写真家ティエリー・ブエット。これから生きる世界をはじめてその身に感じた赤ん坊の顔は、赤みを帯びシワがより、目を開けることさえまだ困難な様子だ。しかし、ブエットがこの撮影にあたり自身に課したのは美しいイメージを作ることではなく、本質を捉えることであったという。それゆえに、彼は余計な背景は入れず、正方形のフォーマットで、被写体の表情に迫るという統一したスタイルを貫き、修正や補正は一切加えていない。また、撮影に協力した病院は、ブエット自身の娘が生まれたパリ郊外にある体外受精専門の病院でもあり、作品に登場する新生児は、そこでこの世に生を受けた子たちだ。ブエットは新生児が感情を表したその瞬間を撮ることに専念したという。彼らのポートレートは、このテクノロジーによって誕生しうることができた人間の生命の力強さを証明するものでもある。

ティエリー・ブエットは法律を学んだ後、軍所属写真家としてキャリアをスタート。パリで長い歴史を持ち数々の著名人が撮影を依頼することで有名なスタジオ・アルクールのディレクターなどを経て1983年に独立した。Vogue（ヴォーグ）、Harper's Bazaar（ハーパース・バザー）Vanity Fair（ヴァニティ・フェア）等の雑誌をクライアントに持ち、ポートレートやルポルタージュのジャンルで活躍。2011年にフランス文化担当大臣より「Knight（ナイト）」の称号を授与された。

4a, 4b. WILL—Kikujiro Fukushima, a photojournalist (In collaboration with Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University)

WILL：意志、遺言、そして未来—報道写真家・福島菊次郎

（立命館大学国際平和ミュージアム共同企画）

Kikujiro Fukushima ｜ 福島菊次郎（日本）

堀川御池ギャラリー 2階／立命館大学国際平和ミュージアム

［左より］
自衛隊と兵器産業
発作に苦しむ被爆者 中村杉松さん
成田空港建設反対闘争 集結する反対派
© 福島菊次郎／共同通信イメージズ

広島の原爆被害を記録し、福島原発事故を追った
反骨の写真家を追悼するレトロスペクティブ

福島菊次郎は1921年山口県下松市に生まれた。戦後、広島における原爆被災者たちの困窮生活を知り、写真に記録することを決意。10年間にわたる取材をまとめた写真集『ピカドン ある原爆被災者の記録』（1961年東京中日新聞）は日本写真批評家協会特別賞を受賞した。これを機にプロとして活動を開始した彼は、三里塚闘争、ベトナム反戦運動、全共闘、自衛隊、公害、福祉、環境問題、若者の風俗等々、戦後の日本がかかえる様々な問題に取り組み、『中央公論』、『文藝春秋』、『朝日ジャーナル』などの雑誌で発表した写真は、約3300点におよぶ。1988年以降は癌を患いながらも、自作による約400点の写真パネルを制作し、「戦争責任展」等、問題を提起する写真展を開始、700カ所以上で開催した。2011年の福島第一原子力発電所事故発生に際しては、病をおして取材活動を再開するも、2015年9月24日脳梗塞のため激動の人生に幕を下ろした。

本展は本人が生前に自作し、取材コメントなどを付したベニヤ製パネルを中心に構成される。堀川御池ギャラリーでは、平和ミュージアムでの大規模展示へと連なるダイジェスト版として、約30点を展示予定であり、反骨の写真家・福島菊次郎を追悼し、その活動を振り返る。ドキュメンタリー映画『ニッポンの嘘 報道写真家 福島菊次郎90歳』（2012年）も同時期に上映予定。

5. Midway : Message from the Gyre
Midway：環流からのメッセージ

Chris Jordan + Jurgen Lehl ｜ クリス・ジョーダン（アメリカ）＋ヨーガン・レール（ドイツ）

誉田屋源兵衛 黒蔵

“ミッドウェイ”とは聖と俗の中間
写真家が無惨な雛鳥を撮り、デザイナーがプラスチックゴミで美しいランプを作る理由とは？

［左より］
CF000478 Unaltered stomach contents of a Laysan albatross fledgling,Midway Island, 2009 (from the series *Midway: Message from the Gyre*). ©Chris Jordan
CF000668 Unaltered stomach contents of a Laysan albatross fledgling, Midway Island, 2009 (from the series Midway: *Message from the Gyre*). ©Chris Jordan
CF000441 Unaltered stomach contents of a Laysan albatross fledgling, Midway Island, 2009 (from the series Midway: *Message from the Gyre*). ©Chris Jordan

最も近い大陸からも約3200キロの距離にあり太平洋の真ん中に浮かぶミッドウェイ諸島には、年間20トンにもおよぶゴミが流れ着く。アホウドリの雛の死骸から山盛りになったペットボトルのキャップが露出するのは、親が食べ物と間違い与えてしまったからだ。クリス・ジョーダンが無惨な雛の骸を写真に撮って知らしめるのは、ゴミが海鳥を死に至らしめる現実だけでなく、現代文明のありさまを映すもう一つの肖像だと言えよう。本展示作《ミッドウェイ》は、ジョーダンによる最新作にあたり、同時制作のドキュメンタリー映画『ミッドウェイ』のパイロット・ヴァージョンも会期中に公開予定。

これまでも消費社会に関わる問題を制作テーマとしてきたジョーダンは、文明社会が排出する残骸物を撮影した「Intolerable Beauty : Portraits of American Mass Consumption（耐えられない美：アメリカ大量消費社会の肖像）」（2003–2005年）や、現代アメリカ社会にまつわる衝撃データを視覚化した「Running the Numbers : An American Self-Portrait（数字は語る：アメリカの自画像）」（2006年–）で世界的に評価された。

［写真右のみ］
撮影：田原あゆみ

ヨーガン・レール（ドイツ）

本展では40年あまりを日本で過ごしたヨーガン・レール（デザイナー 1944–2014）が、砂浜で拾い集めたプラスチックのゴミ にメッセージを込めて制作したランプを併設する。
ヨーガン・レールは1944年ポーランドに生まれる。パリやニューヨークでテキスタイルデザイナーとして活躍し、1971年に来日、1972年にブランド「ヨーガンレール」を設立した。2006年には、職人の手仕事を尊重し、天然素材を使用した服、ベッドリネン、器、家具などを扱うブランド「ババグーリ」を立ち上げる。

早くから地球や環境に目を向けていたヨーガン・レールは、90年代後半から、沖縄県石垣島に農園を作り、海辺の家で1年の3分の1を過ごすようになる。砂浜を歩いているときに、貝殻や珊瑚にもまして目についたという海から流れ着いた大量のゴミは、ほとんどがプラスチック製品の残が いであり、そのゴミを集めてランプは作られた。醜いゴミから 美しいと思えるもの、実用的なものを作ることを「作ることを仕事にしている私の小さな抵抗」としたヨーガン・レールの思いが込められ たランプを、誉田屋源兵衛 黒蔵という普段非公開の蔵で見る貴重な機会となる。

6. EXILE: 1945 to Today by Magnum Photographers
マグナム・フォト／EXILE—居場所を失った人々の記録

無名舎

［左より］
Civilians returning home, Pont L'Abbé, France, June 15th, 1944.
©Robert Capa / International Center of Photography / Magnum Photos
Refugees in the desert. The Sha-alaan One camp, is the worst camp.
They have orderly food lines with thousands of refugees waiting calmly
for food distribution from the "Charitas" charity organization. Jordan, 1990.
©Chris Steele-Perkins / Magnum Photos
Volunteers help refugees come ashore near the village of Skala Sikamineas,
after travelling on an inflatable raft from Turkey. Lesbos, Greece, August 2015
©Paolo Pellegrin / Magnum Photos

国際写真家集団マグナム・フォトが問う
難民・移民問題とヒューマニティ

国際紛争や内戦、宗教対立、大量虐殺、環境破壊等々により、祖国を追われる人々……。戦争や人権等、様々な問題に取り組むマグナム・フォトの写真家にとって、難民や移民は主要なテーマであり続けてきた。25人の写真家によってそれぞれの視点で撮影された力作およそ90点で構成される本展では、第二次世界大戦以降、今日に至るまで続くこの問題の現実を浮き彫りにし、報道写真が問うてきたヒューマニティを再考する機会ともなるだろう。なお、展示は木製ブロックにマウントされた写真を来場者がじかに手に取り、触れて感じることができるインスタレーションとなる予定。

最高峰の写真家集団としてつとに知られてきたマグナム・フォトは、4名の著名な写真家、アンリ・カルティエ＝ブレッソン（フランス）、ロバート・キャパ（ハンガリー）、ジョージ・ロジャー（イギリス）、デビッド・シーモア "シム"（アメリカ）によって1947年に創立された。メンバーにはエリオット・アーウィット、ジョゼフ・クーデルカ、スティーブ・マッカリー、マーティン・パー等々、歴史に名を刻んだ写真家の名が多数連なる。

出展予定作家：アバス、久保田博二、スーザン・メイゼラス、ブルース・ギルデン、ポール・フスコ、ロバート・キャパ、クリス・スティール＝パーキンス、パオロ・ペレグリン他。

7. Tryadhvan

トリャドヴァン

Eriko Koga ｜ 古賀絵里子（日本）

京都市指定有形文化財 長江家住宅

「生と死」をテーマに取り組む新進写真家の新作個展
途切れることなく繋がる過去・現在・未来

［左より］
Tryadhvan, 2015
©Eriko Koga

KYOTOGRAPHIE京都国際写真祭のサテライトイベント「KG+」に参加の展覧会から、優れた展示に授与される「KG + AWARD by GRAND MARBLE」で2015年度グランプリを受賞した古賀絵里子は、1980年福岡県に生まれ、2012年さがみはら写真新人奨励賞、2014年日経ナショナルジオグラフィック写真賞優秀賞等を受賞してきた期待の新進写真家。前作《一山（いっさん）》は弘法大師空海によって密教の道場が開かれてから1200年目を迎えた高野山へ通い、荘厳な寺院や自然、人々の日常を、5年の歳月をかけて記録した力作であり、古賀の作品にはいつも「生と死」という根源的なテーマが通底している。

今回の出展作《Tryadhvan（トリャドヴァン）》は、自身が宿した新たな生命を軸に、静物や自然、家族などを写した新作。《Tryadhvan》はサンスクリット語の仏教用語で、過去世・現在世・未来世を指す《三世（さんぜ）》を表す言葉。現在は過去の結果、未来は現在の現れであり、三世は途切れることなく繋がり、因果によって結ばれているという教えを表すのだという。なお、本展はフランス国立造形芸術センターの写真コレクション・キュレーター、パスカル・ボースがキュレーションを務める予定。

8. Coming into Fashion—A Century of Photography at Condé Nast
コンデナスト社のファッション写真でみる100年
presented by CHANEL NEXUS HALL

京都市美術館別館 1階

［左より］
Edward Steichen, American Vogue, December 1923
©1923 Condé Nast
Erwin Blumenfeld, American Vogue, March 1945
©1945 Condé Nast
John Rawlings, American Vogue, March 1943
©1943 Condé Nast
Sølve Sundsbø, Love, Spring / Summer 2011
©Sølve Sundsbø / Art + Commerce

ファッション誌Vogueを擁するコンデナスト社のアーカイブから、
ヴィジュアルの最先端を歩んだファッション写真の歴史を紐解く。

各時代のすぐれた才能が結集し、視覚文化の発展に大きく寄与してきたファッション写真。その歴史をふり返るとき、欠くべからざる人物が1909年にファッション誌Vogue（ヴォーグ）を買収した事業家コンデ・ナストだ。彼はいちはやく写真の可能性を見抜き、すぐれた写真家を採用してファッション写真をアートの領域にまで高めることに貢献したのである。以来、コンデナスト社はVogue、Vanity Fair（ヴァニティ・フェア）、Glamour（グラムール）等の雑誌を通じ、100年以上にわたりファッション写真の傑作を世に送り出してきた。そのアーカイブは黎明期に活躍したエドワード・スタイケン、戦後の黄金期を牽引したアーヴィング・ペンやウィリアム・クライン、美意識に革新をもたらしたヘルムート・ニュートン等、名だたる写真家の名作によって構成されている。

そんなコンデナスト社の貴重なコレクションから作品を選りすぐった本展は、シャネル・ネクサス・ホールでの開催（2016年3月18日–4月10日）に次ぐ世界巡回展となる。東京では厳選展示され、京都ではすべての巡回作品が展示される予定。

企画・協力：Foundation for the Exhibition of Photography

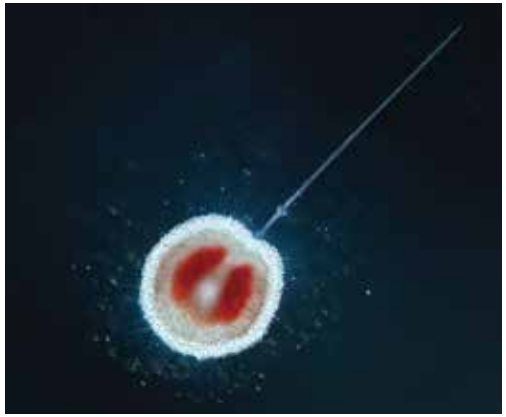
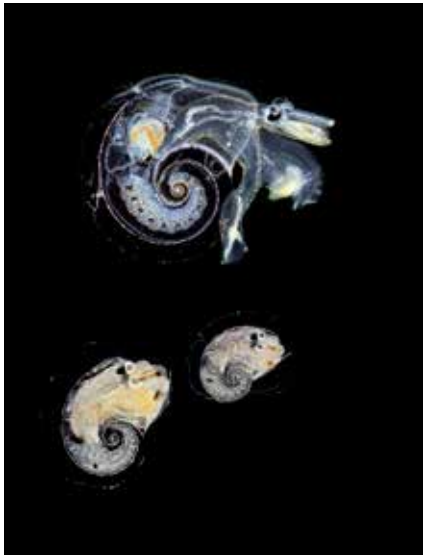
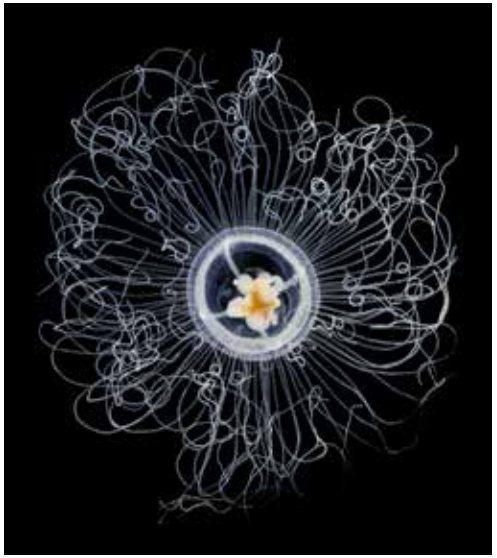
9. PLANKTON: A Drifting World at the Origin of Life
PLANKTON 漂流する生命の起源

Christian Sardet: images ｜ クリスチャン・サルデ（フランス）：イメージ
Shiro Takatani: installation ｜ 高谷史郎（日本）：インスタレーション
Ryuichi Sakamoto: sound ｜ 坂本龍一（日本）：サウンド

京都市美術館別館 2階

［左より］
The ctenophore *Bolinopsis mikado* from Shimoda bay
©Christian Sardet and The Macronauts / Plankton Chronicles Project
The radiolarian *Spongodiscus biconcavus*
Bay of Shimoda, Japan.
©Christian Sardet and The Macronauts / Plankton Chronicles Project
Atlanta peronii heteropod mollusk
©Christian Sardet / Plankton Chronicles Project
A *Oceania armata* jellyfish.
Bay of Villefranche sur Mer, France.
©Christian Sardet / Plankton Chronicles Project

世界の海を漂うプランクトン
生命の起源を映す、美しくも神秘的な世界

プランクトンとは地球上の水域に浮遊して生きる水生生物の総称。およそ35億年前に現れたこの神秘の生命は、ほとんどがミクロン単位の微小な大きさのため肉眼で見ることは難しいが、すべての食物連鎖の基礎となり、酸素の半分を生成しているだけでなく、石油・天然ガスといったエネルギー資源のもととなってきた。

そんな生命の起源ともいえるプランクトンの美しさや多様性を広く伝えるため、顕微鏡写真や映像で世界中のプランクトンの姿を記録し公開するのはフランス国立科学研究センター名誉ディレクター、クリスチャン・サルデである。世界規模で調査・研究を行う「タラ号海洋プロジェクト」の共同設立者でもあるサルデは、自らも乗船し世界中の海で精力的にプランクトンの撮影を行っている。

彼が製作したドキュメンタリーやアニメ、DVD作品は数々の賞を受賞しているが、中でも欧州分子生物学機構によって授与されたヨーロッパ賞は、生命科学の広報活動が評価されてのもの。日本では、河出書房新社より『美しいプランクトンの世界』（2014年）が刊行されている。

本展ではサルデがこれまでに撮影した写真・映像に加え日本の下田で撮り下ろした最新作や、マイクロプラスチック（海中の微小のゴミ）の問題に触れた作品などを展示予定。

［左より］
Ice Core
©Shiro Takatani 2013
MARS
©Xavier Barral + Shiro Takatani 2014
ST/LL
©Shiro Takatani 2015

高谷史郎（日本）

展示インスタレーションは日本を代表する映像作家の高谷史郎が手がける。

1963年奈良県生まれ。京都市立芸術大学環境デザイン科在学中より、国際的に活躍するアーティスト・グループ「ダムタイプ」に創設メンバーとして参加し、映像、照明、グラフィック、舞台装置等々、幅広く手がける。並行して1998年よりソロ活動を開始。最先端の技術を駆使した表現で、日本を代表する映像作家として多彩な活動を行ってきた。また、気候変動について考えるための北極圏遠征プロジェクトCape Farewell（イギリス）に日本人アーティストとして初めて参加するなど、自然現象への深い関心をよせる。

パフォーマンス作品には「CHROMA（クロマ）」（2012年）、坂本龍一、野村萬斎とのコラボレーション作「LIFE-WELL」（2013年）等があり、2015年には新作「ST/LL」がベルギーおよびフランスで上演され、喝采をあびた（2016年1月びわ湖ホールにおいて凱旋公演）。主な個展に「明るい部屋」（2013年、東京都写真美術館）などがある。

坂本龍一（日本）

インスタレーションのサウンドは音楽家 坂本龍一が手がける。

音楽家。1952年東京都生まれ。78年『千のナイフ』でソロ・デビュー、同年YMO結成に参加。YMO散開後、88年映画「ラスト・エンペラー」でアカデミー賞作曲賞を受賞するなど、常に革新的なサウンドを追求する姿勢は世界的評価を得ている。2007年には「more trees」を設立し森林保全と植林活動を行なうなど90年代後半より環境問題などへ積極的に関わる。東日本大震災後、「LIFE311」、「こどもの音楽再生基金」、「東北ユースオーケストラ」などさまざまな被災者支援プロジェクトに関わるとともに、脱原発・非核を訴える活動もおこなっている。音楽とアートを横断する柔軟な視点と、歴史・思想・哲学まで包含する幅広い知識に対してアートの分野からも信頼が厚く、2014年札幌国際芸術祭（SIAF）のゲスト・ディレクターに就任するなど、アート界への越境も積極的におこなっている。

主な作品に『B-2 UNIT』（1980年）、『BEAUTY』（1989年）『LIFE』（1999年）、『THREE』（2012年）などがある。「LIFE-WELL」（2013年）等では高谷史郎ともコラボレーションをおこなっている。

10. The Green Train
緑皮車

銭海峰｜チェン・ハイフェン（中国）
Qian Haifeng

ロームシアター京都

電気技師が8年の歳月をかけ鮮烈に写す
中国の最安列車“The Green Train”の乗客たち

［左より］
The Green Train
©Qian Haifeng

中国の緑皮車とは、文字通り緑色の列車を指す。かつて中国を走る鉄道の車両は深緑色に統一されていたが、しだいに特急や高級列車、改良された新型の車両は別の色で塗装されるようになり、緑皮車はもっとも料金の安い最下層列車の代名詞になったという。国慶節等で出稼ぎ労働者の帰省におこる“人民大移動”や、海外での“爆買い”が話題の特権・中産階級とは大きく異なる日常が、その電車の中では繰り返されている。

写真家チェン・ハイフェン（銭海峰）は、バックパッカーとして中国じゅうを旅行しながら、そんな最低料金の客車に乗る人々を撮影し続けた。8年間を費やしまとめた《The Green Train（緑皮車）》には、日々を生きる人々への優しい眼差しと、研ぎ澄まされた写真感覚が表れている。

チェン・ハイフェンは1968年江蘇（こうそ）省無錫（むしゃく）市生まれ。1995年に写真をはじめ、今もホテルの電気技師として働きながら制作を続ける。本作《The Green Train》は、中国南部の連州市で開催される写真祭、Lianzhou Foto FestivalのLianzhou Foto Awardで2015年度の大賞を受賞したほか、近年、新聞社主催のコンクール等で度々受賞し、期待の写真家として注目を集める。

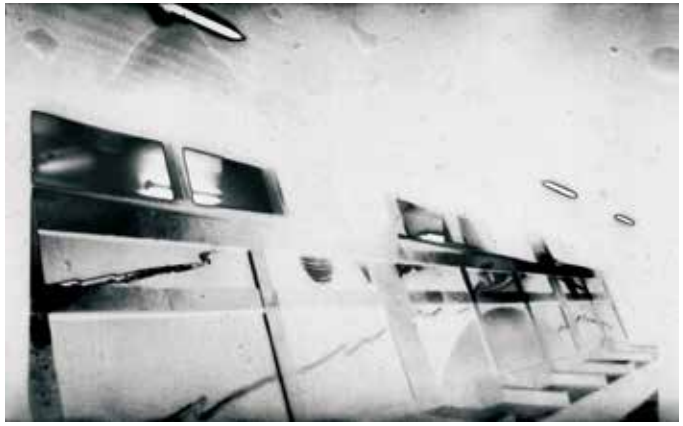
11. LA-LV / LDN_Process

Antony Cairns｜アントニー・ケーンズ　HARIBAN AWARD 2015

SferaExhibition

［左より］
LA-LV_58 from the LA-LV series　2015 / Aluminium silver gelatine print
E.I LA-LV_66　2015 / Electronic Ink Screen
E.I LA-LV_71　2015 / Electronic Ink Screen

都市にひそむ異次元をのぞく
現代の感性と伝統の技術が出会う時



2015年度ハリバン・アワード最優秀賞を受賞した期待の新鋭、アントニー・ケーンズの日本初個展。

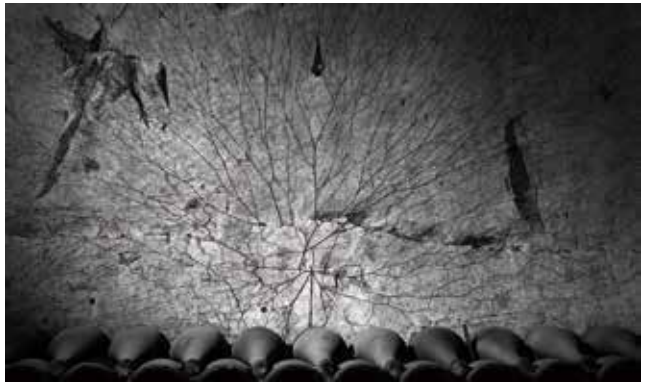
1980年ロンドンに生まれたケーンズは、ロンドン芸術大学で伝統的な写真技術を学び、後に作風を決定づける古い化学技法を習得。AMC Booksより生まれ育ったロンドンをモチーフとした「LDN」シリーズの写真集を3冊出版しFotobookfestival（ドイツ・カッセル）にてBest Photobooks 2013に選出されている。近年はタブレット端末に映った電子インクの画像をプラグアウトして定着させ、本体を分解し取り出したモニターを作品として発表している。タイトルの「LA」とはロサンゼルス（Los Angels）、「LV」とはラスベガス（Las Vegas）であり、二都市にて撮影された作品を展示する。本展ではタブレット端末を使った作品に加え、タブレットの画像から作成したコロタイププリントや、アルミ板にプリントした作品など、様々な技法による作品を出展予定。

展示制作は、ハリバン・アワードを主催する便利堂（1887年／明治20年創業）のコロタイプ工房が全面サポート。150年前にフランスで発明されたコロタイプは、連続階調による深みのある質感と強い耐久性等が特徴である。現在、事業として多色刷りコロタイプを提供しているのは、世界でも便利堂が唯一となっている。

12. Light by Erwin Olaf presented by Ruinart

アーウィン・オラフ

ASPHODEL



［左より］©ERWIN OLAF

1729年創業の世界最古のシャンパーニュ・メゾン、ルイナールが最初にアーティストに作品制作を依頼したのは、120年前にさかのぼる。1896年、ルイナールはチェコのアーティスト、アルフォンス・ミュシャ（Alphonse Mucha）に広告のポスターの制作を依頼した。

それから120年という記念すべき今年、ルイナールは世界的に活躍する写真家であり、様々な分野で幅広く活動を広げるアーティストでもあるオランダ出身のアーウィン・オラフを迎え、近年世界遺産に登録された雄大なチョークセラー（白亜質のシャンパーニュ貯蔵庫）を撮影した作品を発表する。

彼のレンズ越しに写し出される完璧な美学と卓越した物語性は、オラフこそがルイナールの特別な世界を伝えるにふさわしいアーティストであることを確信させた。

アーウィン・オラフとのコラボレーションは、2016年3月9日にパリにて世界的に公式発表され、その後KYOTOGRAPHIEにて日本で初めて展覧会が行われる。

11. YKSI: Mouth of the River, Snake in the Water, Bones of the Earth

Arno Rafael Minkkinen ｜ アルノ・ラファエル・ミンキネン（フィンランド）

両足院（建仁寺内）

［左より］
Oulujarvi Afternoon, 2009
©Arno Rafael Minkkinen courtesy PUG OSLO
Narragansett, 1973
©Arno Rafael Minkkinen courtesy PUG OSLO
Fosters Pond, 1989
©Arno Rafael Minkkinen courtesy PUG OSLO

ヌーディティとは精神性を肌で感じること　――アルノ・ラファエル・ミンキネン
フィンランドを代表する写真家の本格個展

森や湖などの美しい自然とともに、一糸まとわぬ自身の姿を撮影する写真家アルノ・ラファエル・ミンキネン。この独自の制作スタイルで国際的に高く評価されながら、日本国内では断片的にしか紹介されてこなかった彼の本格個展がついに実現する。

ミンキネンはアメリカ・マサチューセッツ州にあるフォスターズ・ポンドに居を構え、彼の故郷フィンランドとよく似たこの地で30年近くにわたって作品を制作してきた。本展ではフォスターズ・ポンドで制作された作品等の他、今回のために京都で撮り下ろした新作も出展される予定。展示予定のシリーズのタイトル《THE SNAKE IN THE WATER》にある“水に泳ぐ蛇”は、自然が生み出す大きな力に逆らわず、向かい風のなか波間を縫って泳ぐ蛇の姿と自身の制作や人生そのものを重ね、表した言葉である。

ミンキネンは1945年フィンランドのヘルシンキに生まれ、51年にアメリカへ移住した。70年代に制作を開始した彼の作品はニューヨーク近代美術館（MoMA）等、世界各国の美術館に所蔵されている。2005年発刊のレトロスペクティブ写真集『SAGA: The Journey of Arno Rafael Minkkinen』（Chronicle Books）を機に企画された回顧展は、世界7カ国を巡回した。

14. BRICOLAGE PHOTOGRAPHY
K-NARF

村上重ビル 地下

APE-O-GRAPHICCONTRAPTION, 2015
©K-NARF

フランスの国籍を持ち、現在日本を拠点に活動しているK-NARFは、いわゆる写真家というより写真をつくる人と言え、身近な道具や材料を用いて写真を再構築している。その制作過程にあえて遊び心や素人っぽさを残しながら、“Ready Made”、”Arte Povera”、”D.I.Y”などの現代アートの芸術運動から続く“Bricolage”の信念を自身の写真へ応用している。会期中全日16–18時に、作家本人が滞在制作を行うのも見どころのひとつ。

15. Sarah Moon 1, 2, 3, 4, 5,
サラ・ムーン（フランス）

何必館・京都現代美術館

「The lock's girl」、1990年、
何必館・京都現代美術館蔵 ©Sarah Moon

サラ・ムーンの集大成的な作品集『Sarah Moon 1, 2, 3, 4, 5,』（何必館・京都現代美術館刊）の日本語版の刊行記念展。サラ・ムーンのコレクションで日本随一を誇る何必館・京都現代美術館が、古いものと新しいもの、ファッションとランドスケープなど、相反するものの関係性をテーマに展覧会を開催する。

KYOTOGRAPHIE
パブリックプログラム＆教育プログラム

KYOTOGRAPHIEは、トークやワークショップなど
様々なイベントを開催します。
フェスティバルを訪れる来場者が、フェスティバルをより深く楽しみ、
写真を学ぶことができる場を提供しています。

1. インターナショナルポートフォリオレビュー
2. マスタークラス＆ワークショップ
3. キッズプログラム
4. 教育プログラム
5. パブリックプログラム

の5つのカテゴリで、写真に興味を持つ方からプロの写真家、
子どもから大人まで、あらゆる方に向けたイベントを用意しています。
KYOTOGRAPHIEはこれらのプログラムを通じて、
人々の交流を育むプラットフォームを創出。
日本の写真教育、活動の発展に貢献していきます。
各プログラムの詳細や参加方法はホームページにてまもなく公開予定です。

1. インターナショナル・ポートフォリオレビュー（第2回）

開催予定日：2016年4月23日［土］、24日［日］

KYOTOGRAPHIEは写真界を牽引する各方面のプロフェッショナル達をポートフォリオレビューのレビュアーとして迎え、
期間中には京都には国内外から写真界の第一人者たちが集います。参加するきっかけは、
制作途中のプロジェクトへのアドバイスでも、完成した作品の発表の機会を探ることでもかまいません。
KYOTOGRAPHIEのポートフォリオレビューは、写真家と写真界を牽引するプロフェッショナルの出会いの場をつくり、
さらなる飛躍へのチャンスを提供することを目的としています。
レビューは、20分間のレビューと10分間のインターバルとで構成されます。
レビュアーは、希望のレビュアーの中から最低一人と、提出作品から考慮されたKYOTOGRAPHIE推薦レビュアーとが
割り当てられます。参加費やレビュアー一覧などの詳細情報はウェブサイトにてまもなく公開予定です。
また、今回新たな試みとして、4月24日［日］に「KYOTOGRAPHIE ポートフォリオレビュー＆KG＋パーティー」を開催。
レビューとはまた違った環境で、レビュアーや他の写真家 たち、KG＋に参加するアーティストと繋がり、
交流することができるまたとない機会です。会場では、「360°映像サラウンドプロジェクションシステム」を使用し、
レビュアーの投票によって選出された作品を発表・投影予定です。

2. マスタークラス＆ワークショップ

フェスティバル期間中、写真家向けの特別講義やワークショップを開催します。
海外の写真団体やKYOTOGRAPHIE出展作家によって、
参加者の写真表現をより深化させ、表現の幅を拡張するような機会を提供します。

KYOTOGRAPHIE × ICP（International Center of Photography）エディティングセッション

撮る行為と同じように、写真の編集作業は大切なプロセスです。今年度、ポートフォリオレビューにあわせ、
ニューヨークの国際写真センター（International Center of Photography）から講師を迎え、写真の編集に関するセッションを行います。
日程はポートフォリオレビューの直前を予定しています。参加枠に限りがありますので、事前選考があります。

ICPマスタークラス　ステファニ・ド・ルジェによるポートレート撮影クラス

ICP講師のステファニ・ド・ルジェを招き、3日間のマスタークラスを開催します。
ポートレート撮影の仕事を想定し、限られた時間の中でいかに優れた写真を撮影するかを具体的な技術とともに学びます。
当マスタークラスは、下記のワークフローに沿って行われます。

・リサーチ（ギャランティーの設定、クライアントとの交渉、機材の準備など）
・撮影（限られた環境で背景を探す、ライティング、被写体との関わり方など）
・最終段階（編集、レタッチ、納品、請求）

このワークショップは、仕事でポートレート撮影をするプロの写真家や、上級者を対象にしています。

3. キッズプログラム

子どもたちとそのご家族が楽しみながら、フェスティバルと写真を体験できる
イベントをご用意しています。ピンホールカメラのワークショップや写真絵本作り
ワークショップなどを含む、幅広い年齢層を対象とした様々なイベントを開催します。

キッズパスポート

より多くの子どもたちにフェスティバルを楽しんでもらうため、
「KYOTOGRAPHIE キッズパスポート」を配布します。パスポートに見立てたカラフルな
小冊子には、子どもたちが興味をそそられるような、展示会場で楽しめるアクティビティが満載。
キッズパスポートにはKYOTOGRAPHIEの会場で集めるスタンプラリーがついており、
すべて集めた子どもたちにはスペシャルなプレゼントもご用意しています。

4. 教育プログラム

KYOTOGRAPHIEは、学校などの教育機関との連携を
積極的に行っています。京都市教育委員会からの承認を受けている、
「KYOTOGRAPHIEエデュケーションキット」
（ウェブサイトからダウンロード可能／近日公開）の配布も行っています。
エデュケーションキットはKYOTOGRAPHIEの内容を網羅する、
教育現場に最適化された教材です。
また、学校向けに展示の無料公開やツアーも行っています。

KYOTOGRAPHIEは複数の学校とパートナーシップを結んでいます。
学校での写真教育に関連するワークショップやイベントの開催や
共同制作の展示など、KYOTOGRAPHIEやKG＋（P30）と
つながる試みを多く行っています。

5. パブリックプログラム（来場者向けプログラム）

すべてのKYOTOGRAPHIEの展示には、講演やトークイベントなど、関連した無料プログラムが用意されています。
その他にも、写真の初心者でも楽しめるワークショップなど、フェスティバルをより深く楽しむのに最適なプログラムを多くご用意しました。
こちらも近日中に詳細を公開予定です。

週末ガイドツアー

週末とゴールデンウィークには、KYOTOGRAPHIEのガイドによるガイドツアーが開催されます。
KYOTOGRAPHIEの数会場を訪れるガイドツアーが、1日に2回、日本語にて
90分程度行われる予定です（第1週目を除く）。
わかりやすく、示唆に富んだ解説により、KYOTOGRAPHIEをより楽しんでいただけます。
ご予約は不要、KYOTOGRAPHIEパスポートをお持ちの方は無料です。
詳細や日程は、近日公開予定です。
ホームページのサイトメニューのPractical Informationにてご確認ください。

昨年開催イベント

・展示作家によるトーク、対談、ブックサイン、撮影会
・スペシャルトーク「伝統と革新」（譽田屋源兵衛）
・コロタイプ・ワークショップ（便利堂）
・写真×装丁ワークショップ（ミシマ社の本屋さん）
・KYOTO JAZZ SEXTET tributes to
BLUE NOTE RECORDS等ジャズイベント多数
・ナイトミュージアム in 市役所前パビリオン

特別プログラム
Sustaina-village by KYOTOGRAPHIE

本年度より初めての関連プログラムとして、
今年度のメインエリアとなる岡崎にて屋外イベントを開催します。
日中は2016年のメインテーマである
「Circle of Life　いのちの環」にちなんだ、
サステイナブル（循環型持続可能）な社会のあり方を
提案するようなマルシェが開かれ、
夜は巨大スクリーンにテーマに関連したスライドショーなどが上映。
ゴールデンウィークの京都・岡崎を舞台に、
子どもから大人まで楽しめる文化交流の場を目指します。

［開催予定日］
2016年5月3日（火・祝／憲法記念日）・4日（水・祝／みどりの日）
［開催予定場所］
岡崎公園およびロームスクエア（京都市美術館別館前広場）
［プログラム］
・屋外スライドショー
大型スクリーン＆プロジェクターを設置して、写真家の作品を投影する（3台-5台）
・マルシェ
「オーガニック」や「リサイクル」をテーマにした、飲食物や雑貨などのマーケットを開催
・ワークショップ
「サスティナビリティ」に関連したワークショップを開催
例：自転車発電ワークショップなど
・屋外ライブ

KYOTOGRAPHIE サテライト・イベント KG＋

KG＋（ケージープラス）は、これから活躍が期待される写真家やキュレーターの発掘と支援を目的に、2013年よりスタートしたアートプロジェクトです。KYOTOGRAPHIE京都国際写真祭と連携し、同時期に開催することで国際的に活躍する写真家やアーティスト、国内外のキュレーター、ギャラリストとの出会いの場と国際的な情報発信の機会を提供します。

4回目となる2016年は、京都から新たな才能を国際的に発信することを目指し、世界を舞台に活躍する意欲ある参加者を公募し、約30の展覧会を選出します。対象者には職業、年齢、性別、国籍などの制限はありません。また、ギャラリーや美術館などで発表するアーティストのみならず、既存の枠組みや分野の領域を超えて活動する人々も対象とし、写真表現のこれまでにない創造性／想像性を世界的なネットワークを通じて発信します。

また「KG＋ AWARD」を開催し、受賞者1名にはKYOTOGRAPHIE 京都国際写真展への正式な参加枠と制作費を授与するなど、次代を担うアーティストの活動が次のステップにつながる機会を提供し、継続的な支援を行います。また、本プロジェクトでは文化施設だけでなく、町家、寺社仏閣や登り窯など多様なロケーションを舞台に展覧会が開催されるため、観光名所や市街地にとどまらない京都市内の隠れた魅力を発見する機会にもつながり、地域の新たな魅力創造に寄与しています。

［KG＋ 2016開催期間・場所］
2016年4月22日（金）–5月22日（日）、京都市内各所
共催｜京都市、京都市教育委員会
特別協賛｜GRAND MARBLE

KG＋ AWARD

KG＋に選出された展覧会の内、ひとつの展覧会のみKG＋AWARDが授与されます。受賞特典として次年度に開催するKYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭2017への招聘、展覧会開催費用及び会場を提供します。
2015年度のアワード受賞者・古賀絵里子（KYOTOGRAPHIE2016参加アーティスト）は本プロジェクト参加を契機に、フランス・ブルターニュ地方で開催される大規模な国際写真展「La Gacilly 2016」への参加が決定。
これからの活躍が嘱望されるアーティストへ更なる門戸を広げています。

古賀絵里子「一山」2015
©Naoyuki Ogino